『日課』
Unnamed Memory

古宮　九時

――かつて、魔女に「子供ができない呪い」をかけられた王族がいた。
『魔法士殺し』の異名を持つ王剣を、血によって継いでいく国ファルサス。
そのファルサスの王太子が受けたものが、緩慢に王家を終わらせようとするこの呪いだ。
「……そんな風に、後世語られてしまったりするんだろうか、俺の話は」
「他人事みたいに仰いますね、一応呪いの件は極秘事項なんですよ」
主君の他愛もないぼやきに、従者であるラザルは呆れ顔になる。いつものように執務室で仕事をしているオスカーは、机に頬杖をついてラザルに返した。
「もう解かれたから秘密にしなくてもいい気もするんだがな」
「ええ……？　いや、どうでしょう……」
思ってもみなかった話に、ラザルは真剣に悩み始める。
彼の主君であるオスカーが魔女に呪いを受けたのは、わずか五歳の時だ。
そこからオスカーは王家の存亡という重圧の中で、それを打開するために自らを鍛えてきた。学問も剣も教師たちを上回るほどに修めて……けれどそれでも何とかならないのが、魔女の呪いというものだ。
この大陸に五人しかいない、悠久を生きる女たち。
絶望と同義である魔女の干渉を彼から拭ったのも――結局は同じ魔女である女だ。
オスカーが、試練の塔を踏破して連れ帰った魔女、ティナーシャ。彼女が苦心の上に「沈黙の魔女」の呪いを解析して、相殺した。
そうしてオスカーにつけられた枷が外れたのが、ほんの二か月ほど前だ。
ラザルは波乱に満ちた数か月を思い出し、今や王となった主君に問う。
「ところで陛下、無事呪いが解けましたのでお妃候補などは……」
「あいつを妻にするって言わなかったか？」
即答は、半ば以上予想していたものだ。
オスカーは、呪いを解くために連れ帰ったティナーシャを気に入って彼女に求婚し続けている。彼女本人はそれをまったく意に介していていないのだが、オスカーの方も断られることを意に介していない。もはやそういう年中行事としか思えない。
ラザルはしみじみと本音を漏らした。
「諦めていらっしゃらなかったんですね……」
「まだ諦めるほど求婚してないだろ」
「充分なさってたと思うんですけど」
どれだけ図太いのかと思うが、それが彼の仕える王だ。むしろオスカーが図太くなかったら、今頃魔女の呪いの重圧に耐えきれず城から逃げ出していただろう。
けれどそれはそれとして、呪いが解かれたのに状況が動いていない気がするのは何故なのか。
ラザルが溜息を飲みこみかけた時、ちょうど執務室に当の魔女が入ってくる。茶器一式を盆にのせたティナーシャは、部屋に入るなり集中する視線に目を丸くした。
「どうかしたんですか、二人とも？」
「ティナーシャ、そろそろ結婚しないか？」
何が「そろそろ」なのか、ラザルは疑問に思ったが無言を保つ。
きっと世の中には色々な「そろそろ」があって、主君の思うそれは彼の知らないものなのだろう。
ティナーシャにとってもそれは未知の「そろそろ」だったらしく、美貌の魔女はあっさりと返す。
「何がそろそろですか。しませんよ。というかそれ、こっちの台詞です」
「ん……？」
彼女の言葉の意味を掴みかねて、オスカーは首を傾げる。少し考えた彼は、魔女の発言を自分の都合

がいい部分だけ採用したようだ。力強く頷いた。
「何だ、ようやく結婚する気になったのか。よし、いつ式を挙げる？」
「何寝言言ってるんですか。結婚するのは貴方だけですよ。できれば私の契約期間中にどなたか娶って懐妊させてください」
「……何だそれは」
見るからに苦い顔になってしまったオスカーに、ラザルは内心同情した。
求婚を断られるのは年中行事だが、さすがにまったくの無関心を前面に出されると主君の心情を慮って心が痛む。ラザルはまるで自分のことのように胃を押さえた。
ティナーシャは慣れた手つきでお茶を淹れ始める。
「呪いは無効化しましたけど、貴方に呪いをかけた沈黙の魔女は健在ですから。彼女が何を考えてそんな呪いをかけたかは分かりませんが、貴方の婚礼の話が広まれば彼女が次の手を打ってくる可能性はあります。その時、私がいれば貴方も貴方の花嫁も守れますから」
彼女の言葉に、オスカーでさえも軽く虚を突かれた顔になった。
――確かに、王家に呪いをかけた沈黙の魔女は、未だにこの大陸の何処かに潜んでいる。
彼女にとってオスカーの呪いが解呪されたことは、決して歓迎すべきことではないだろう。なら、解呪を知った時、彼女がどうでるか。
それは予想できない、けれど恐ろしい可能性だ。
そこまでを考えて先を見ている守護者に、オスカーは驚きを飲みこむと言う。
「自分の花嫁くらい自分で守るぞ」
「言うと思いました。貴方は確かに充分すぎるくらい強いですけどね、魔女相手に自分ともう一人を守るって結構大変ですよ。長く生きているってことはそれだけ引き出しも多いってことですから」
ティナーシャはお茶を淹れたカップを前に指を弾く。途端それは、数歩離れたオスカーの執務机に移動した。何の詠唱もない短距離転移に、彼は目を丸くする。
これくらいは魔女にとっては息をするのと同じで……つまりは、他の魔女もそうだ。
ティナーシャは闇色の瞳でオスカーを見据える。
「だから、私が対処できるようにしてください。それくらいは契約のうちです」
たとえ魔女同士の戦いになろうとも、彼に未来を拓けるように。
そう彼女は決めているのだろう。大陸最強の女が、それだけの守護を贈ることを約束している。
ティナーシャの差し出すそんな誓いは、塔の達成者と守護者というだけの関係によらない、もっと強いものだ。
彼女が抱え続けていた四百年の妄執――その終わりはおそらく、オスカーがいなければ迎えられないものであったのだから。
ティナーシャは「分かったのなら早く結婚なさい」と言うと、ラザルの分のお茶をカップに注ぐ。それを見ながらオスカーは興味深げに尋ねた。
「ちなみにお前、そんなこと言って沈黙の魔女に勝てるのか？」
「ん……勝てますよ、多分。彼女は強いですけど、私の方が強いです」
気負いのない言葉は、紛れもなく最強の魔女のものだ。自信というより事実を語るそれに、オスカーは頷いた。
「なるほど……。なら、やっぱりお前が妃になれば解決なんじゃないか？」
「振り出しに戻すなよ！　解呪したから！」
「ちなみに俺はお前以外を選ぶつもりはないと言ったはずだが」
「能動的に王家を断絶させるな馬鹿！」
「万が一ここで断絶したら、俺とお前は共犯だと思う」
「私関係ないから！　全力を尽くしたから！」

魔女の叫び声が執務室に響き渡るのはいつものことだ。

まるで平和なそんなやりとりにラザルは嘆息して……花の香のするお茶に口をつけた。